

高 鳳 京

— 韓国最初の組織的社会福祉の実践・
ソウル女子大学初代学長 —

宮澤 正典

(女子大学名誉教授)

● 同志社への道

韓国出身の同志社女子部卒業生中もつとも傑出した人物のひとりが高鳳京であ



高鳳京

ろう。彼女は1924年4月同志社女学校専門学部英文科予科に入学、1928年3月に本科を卒業した。1909年3月、黄海道長淵のクリスチャンホームに一男三女の次女として生まれた。父高明宇は医師、一歳ちがいの妹は東京女子医学専門学校に進学している。父が黄海道遂安の金鉞病院に勤務したころ、同地には学校がなかったので、父は隠真女塾を設立して娘や地域の女兒に教育を受ける機会を与えた。アメリカ留学経験のある父から英語やオルガンを習い、祖父高李崙は儒教教育や漢文を教えたが、良妻賢

母になるための教育はしなかった。むしろ女性指導者になるように自由に自分の意志で生きていくことを意図して育てたという。

同志社を選んだのはキリスト教主義で普通の日本人学校とは違う点があると思つたからであり、外国人教師が多いい英語を学んで最終的留学先をアメリカにしていたからだ。当時、柳宗悦、兼子夫妻が在職していたことも忘れることができない。声楽家の兼子も朝鮮民族美術館設立資金のための独唱会を同志社就任以前から朝鮮でも日本でも催してき

ていた。二人が朝鮮人留学生の同情者であつたのは自然なことであつた。柳は高の一年先輩金未峰（作家、韓国最初の長老派教会女性長老、婦人解放運動家）の乙保証人であつた。

● 同志社女学校専門学部時代

高鳳京と予科から同じクラスで寮でも一緒だった竹村（景山）春那は彼女が初日から朝鮮服であつたと記憶していた。当時の生徒の大半は和服で洋服は一割にもみたなかった。高は洋服かピンクまたは白の朝鮮服を着用したが、クラスメイトに違和感はなかったという。高は宗悦に英文学を、兼子に音楽を習っている。



高鳳京と学友（1927年ごろ）

哲学担当は戸坂潤であつた。在学中の乙保証人は大島正健である。高も所属したミリアムクワイア（聖歌隊）は寮生がモーセの姉ミリアムにちなんで、同志社を救う陰の力という意味をこめて活動していた。シャネップ教授が指導した。日曜日には寮生の日とんどが同志社教会に出席した。高は聖日には決して普段の勉強などはせず静かに過ごしていた。寮生活そのものがキリスト教的色彩の濃い一週間であつたが、日曜日夜のすき焼きパーティーにはしばしば新島八重が加わつた。週日の夕拝ではラーネッドが語つた。

当時、英文科は満州朝鮮へ、家政科は北海道へ修学旅行をした。高の学年は柳宗悦、萩原芳枝両教授が引率した。兼子が同行したのは東亜日報主催の独唱と修学旅行生による合唱の音楽会が企画されていたからである。同紙はこれを大きく報じている。高はこの旅行に参加しなかった。旅行が迫ったとき、親友竹村春那

ミリアム・クワイア
シャネップ教授を中心に
3列目左より景山春那、高鳳京（1927年）

に校庭で「朝鮮をよく見てきてほしい。同胞のみじめさを直視してきて」としみじみ語つた。常そういうことに触れることのなかった温かな彼女には珍しいことであつた。竹村は「高さんは行かなかった。行くのがきつと辛かつたのだらう」と回想していた。修学旅行の後、間もなく柳兼子、シャネップ両教授が引率して名古屋と岡崎で同志社女学校校舍改築資金募集音楽会の演奏旅行がおこなわれ高も参加した。名古屋新聞社後援というこ

ともあつてか、同紙は「堂も破れん許りの拍手喝采」と報じていた。

●同志社大学時代

高鳳京は1928年同志社大学法学部経済学科に入学した。同学部同期の女子は150名中3名で、女専同期の大連出身の王秀生が法律学科にいた。抜群の成績をおさめていたのが社会問題、国際公法、経済学史、英書、仏書などである。選択科目にあった植民政策はとつていない。

大学進学後はキリスト教女子青年会に寄宿した。夜はYWCAで英語を教えた。り、朝鮮人教会で朝鮮語や朝鮮の文学、歴史を教えた。また社会事業に関心をもつて女専時代に引き続き賀川豊彦を尋ねて彼の信仰と事業について学んだ。そういう彼女に対して特高警察が時代とともに訪ねてくるようになった。それより前、八幡市（現北九州市）出身の竹村春那は帰省のとき下関まで高と同行して関釜連絡船に乗る彼女を見送ったものだったが、高は「あれは警察の人よ、私たちを

監視しているの」と竹村に語りかけることがあった。

●ミシガン大学留学

高は元来アメリカ留学を目差していたが、韓国人として最初のパーマー奨学金を受けてミシガン大学に留学する。校友会京城支部は1931年7月10日第1回

定期例会を京城青年会社交室で開催したが、この会が高の歓迎送の会でもあった。「朝鮮人の婦人として母校の最初の法学士高鳳京嬢が8月上旬に更に鵬翼を張つてミシガン大学へ入学の為め其の歓迎と送るの会を兼ねる事となし、丹羽清治郎氏校友会を代表して迎送の辞を述べ、高嬢は上品なる国語にて感謝の辞を以て我等の好意を謝せられ来会者共に晚餐を共



ミシガン大学時代の高鳳京

にし」た（『同志社校友同窓会報』第56号）。

ミシガン大学修士課程では経済学、博士課程では社会学を専攻した。帰国後の1937年に博士号を得た。

●梨花女子専門学校教授時代

高は1935年から1945年まで梨花女子専門学校で教鞭をとった。女専教授の地位にありながら、同女専音楽教授であつた姉高鳳京とともに京城郊外の農村で児童や青年の教育、住民の無料診療、老人介護などの施設、京城姉妹院を設けて自費と募金で運営した。1942年には嬰兒館、翌年には非行少女のための京城姉妹院家庭寮を開設するなど、農村と女性のための社会事業と実践に尽力した。韓国で最初に社会福祉を組織的におこなった人として知られる。

朝鮮総督府はそういう彼女を植民地統治に協力させようとした。例えば女性の戦時生活、皇国臣民としての心得などについて地方巡回講演を課した。しかし講演内容はほとんどの時間を衛生、栄養、

生活など農村婦人の健康や生活改善について述べるのが常であつた。そのため創氏改名することなく本名を貫いたことなどと合せて、しばしば警察に呼び出されるという経験をしていた。

●戦後・解放後の活動

高鳳京は植民地支配下での体験を通して信託統治反対運動に参加する。「36年間、嫌になるほど他人の統治下に苦しんだ。もし試行錯誤があれば、それを直しながらわが民族にふさわしい政治を自らがするように保障しなければならぬ」とした。1946年春、教育使節団の一員として渡米、9月に米軍政下で保健厚生部に婦人局が設けられると初代局長に就任した。「私たちが政治、経済、文化などあらゆる面で幸せにならうとするならば男女が平等で、それぞれ特性を生かし、自分の能力を発揮しなければならぬ」という理念をもつて、とくに女性の地位向上のための具体的な施策をすすめた。公娼制度廃止にも尽力した。また政府文教部学術院社会分科委員、大韓オモ

ニ会会長、少女団（ガールスカウト）会長、大韓赤十字社組織委員、国民教育憲章制定委員、文教部教育政策審議委員会、その他の要職を歴任した。国際的にも活躍した。汎アジア大会、国際教育者大会、第15次、第18次国連総会への韓国代表。ロックフェラー財団奨学金による留学（プリンストン大学、コロンビア大学）の帰途のヨーロッパ旅行中に朝鮮戦争が勃発し帰国できなくなり、その間イギリス国連協会が後援する講演会は800回におよび、国連の韓国派兵感謝、韓国文化の紹介などをおこなった。さらに世界キリスト教大学総長学長会議、アジアキリスト教女子大学女性研究所国際会議、米国連合長老教会総会、大韓キリスト教第35次定期総会、超教派信徒会議などに参加した。

●ソウル女子大学初代学長

1961年韓国長老派教会連合によるソウル女子大学が創立され、その初代学長に就任する。建学理念には彼女の教育観が色濃く反映しており、その精神にそ



同志社女子大学名誉文化博士の学位記を
尹慶恩学長から伝達される高鳳京

高鳳京はかつて女専卒業の翌年に「雑感」と題して次のような一文を書いていった。「ものは徹底的に為したい。しかし過激なる事は欲しない」。「終始一貫する意志が欲しいが頑固なる事は望ましくない。深き勇氣は必要であるが攻撃の氣分は避けるべきである。犠牲の精神は崇ぶべきであるが消極的努力とは区別せねばならぬ。御摂理を信じて従ふべきであるが運命の手に任かきぬ様目を醒ますべきである。自然を愛し萬物に深い興味を



ソウル女子大学開校式（1961年6月）

って発展をとげたと言つてよい。生活教育の実践は、当時の大学教育が知的面のみである風潮への批判がこめられていた。事実、ソウル女子大学では知・徳・術を兼備した女性指導者として備えるため全学生が教室外でも二四時間生活教育をする生活館教育と家庭管理自習住宅教育を実施して現在にいたつてゐる。
湯浅八郎（同志社第10、12代総長、国際基督教大学初代総長）は1966年キリスト教主義教育機関国際委員会の一員

として渡韓した。その機会に韓国の同志社学園同窓会（高鳳京会長）は湯浅を招待して晩餐会を開いた。湯浅は「韓国の同志社人」（『同志社時報』第23号）でそこに出席した各界に活躍中の同窓生を紹介したうえで「最後に、私は高女史が献身的苦闘をつづけてその発展と経営とに精進しておられるソウル女子大学について感想を述べたい」と、とくに言及している。創立数年後の学園で高の教育理念が具体的に展開されている様子を7項目にして挙げて、その最後に次のように記している。「高総長はじめ10人の教授とその家族がキャンパスに居住していて常に学生との個人的な接触や指導につとめている。私はこのような有意義な特色をもつ私学経営に苦心に苦心をかさねて、時には精根つき果てる思いですという高女史の悲壮な告白をきいて、このすぐれた女子教育家に衷心から敬意と同情と感謝とを捧げずにはいられないのである。同志社がこのような韓国女性を卒業生の



ソウル女子大学（1996年）

中にも数えることができるのは、まさに母校の誇りであり光栄であるというべきではあるまいか」。

高は1985年、76歳ですべての公職から引退して名誉学長となり、余生を大学構内で過ごし2000年に没した。私は1996年そこで晩年の彼女にお会いすることができた。その翌年の1997年に同志社女子大学は高鳳京に「最高の敬意をもつて」名誉文化博士号を贈った。贈呈式には尹慶恩学長が代理で出席し、記念講演では高鳳京の生涯と尹学長自身の高学長時代の卒業生としての体験を語った。

もちたい。そして正しい判断力と明瞭な

理解力が欲しい。短を見てはそれを補ひ、醜を見てはそれを美化させるだけの心の余裕を持ちたい。個人の人格を向上させ、社会を美しきものとして再び神に捧げたい。この人間の義務を果たす為の聖き霊の力が与へられたい。」「しかしして凡てを包容する最も円満無欠なる主義に一生を捧げたい」（『同志社女学校期報』第54号）。

若い日に「恭儉努力」家と評された彼女の信仰と思惟があふれる一文である。そして91歳の生涯をそのように生きた人物であつた。

【参考文献】

- 김영철著, 고흥경박사 그의 생애와 교육, 1988, 삼형 (林永喆『高鳳京博士の生涯と教育』図書出版サムヒョン)
- 서울여자대학교 30년사, 1991, 서울여자대학교 (ソウル女子大学校『ソウル女子大学校30年史』)
- 朴宣美「朝鮮社会の近代的变化と女子日本留学—1910～1945年—」『史林』第82巻第4号、1999年

高 鳳 京 (コファンギョン)

1909.3.6 ~ 2000.11.2

韓国黄海道生まれ。1928年同志社女学校専門学部英文科、1931年同志社大学法学部経済学科を卒業。ミシガン大学留学 (M.A, Ph.D)。1935年梨花女子専門学校教授。戦後は保健厚生部婦人局初代局長、国連総会韓国代表、大韓赤十字社組織委員、大韓オモニ会会長、その他多くの官公職を歴任した。1957年梨花女子大学社会学科長。1961年ソウル女子大学初代学長。1970年国民勲章 (冬柏賞) を受賞、1997年同志社女子大学名誉文化博士。

- (京都大学文学部内)
- 湯浅八郎「韓国の同志社人」『同志社時報』第23号、1966年 (学校法人同志社)
- 宮澤正典「同志社女学校と朝鮮」『同志社談叢』第17号、1997年 (同志社史料資料室)